

日本作文の会編

日本の 子どもの詩

山梨





日本作文の会編

日本の 子どもの詩

山梨

岩崎書店

日本作文の会
日本の子どもの詩 19
岩崎書店 昭58
110p 21cm
内容：19 山梨
〔分〕911

日本の子どもの詩 19 山梨

一九八三年一月二五日 初版発行

編者 日本作文の会

発行者 森山甲雄

印刷所 株式会社 K・M・S

株式会社 金羊社

製本所 小高製本工業株式会社

発行所 岩崎書店

東京都文京区水道一―九―二
電話〇三―八二―九一三一(代)

はじめに

各都道府県別につくられた四十七冊のこの本ぜんたいには、一九一八年「赤い鳥」が創刊されてからあとの六〇年間につくられた、日本の子どもたちの詩のおもなものが、年代順にならべてあります。

これらの詩は、そのときどきによつて、児童自由詩、童詩、児童詩、児童生活詩、生活童詩、生活綴方の詩などともよばれ、世界にもまれなものであります。

これらは、ねっしんな先生たちによる創造的な教育のいとなみとしてうまれたものですが、日本の子ども自身がつくரிだした芸術（現代の子どもの「わらべうた」）としても、大きな意味があります。

わたくしたちは、このことを頭において、念入りにこの本をつくりました。

この一冊は、そのうちの「山梨編」であります。どうぞ、ひとつひとついいねいにお読みください。

もくじ



1918
~
1945

8

大きな実

かえる

つばき

畑

七里岩

9

汽車のけむり

がん

南天

汽車の音

月夜

10

風

朝

母

冬の朝

11

知らない人

月夜

青年農夫

12

お月さん

13

稲こきを思い出して

落葉かき

綴方のじかん

夕方

去年の稲こき

14

山羊の子

俵あみ

ぬくとい卵

15

おどつつあん

雨

ちゃんあらい

16

暑い夕方

十五夜

17

蚕

ヨル

体操

18

夕焼け

ふき取り

19

馬方

二年生のとびっこ

薪をとっての帰りがけ

20

夕方

作切り

21

陸軍病院慰問

木きり

22

梅雨

麦まき

初夏の夜

23 夕方の富士

連絡船

子守

24 見送り

出征軍人を送る

はなどり

26 かいばまるけ

炭焼のおじさん

若芽

27 春の土手

いじんの花火(湖上祭)

28 とんび

猫柳

わかさぎつり



1945
～
1959

30 十五夜さん

もし おとうさんがいたなら

31 とても たたけんや

赤いはね

32 もろこし

夜空

33 おとうさん

おねえちゃんはやめに行けない

34 げた

おばあさん

35 新しいくつ

父のふるさと

36 先生のつくえ

「くもの糸」を読んで

38 行進

先生のつくえ

39 テスト

立たされ

40 はじめて製図をならう

たこあげ

41 いなごとり

火おこし

42 横とり

母

43 石のひびき

霧の朝の新聞配達

44 うし

きんぎょ

45 やぎ

やぎ

46 馬

47 牛 牛

ぶどう

48 にちようのにわ

ぶどう

かせ

49 ゆうひ

おちば

50 夕日

山のうえから

ほし柿



1960
~
1969

52 ゆき

春がくる

53 ねこやなぎ

ゆうやけ

54 はやしの中

屋根にのぼって

でんきどびん

55 ジュース

ごぜん山へのぼる

あめ

56 雨

石つみ

57 しろんこ(雪虫)

新しいたたみ

58 停電

秋の夜空

59 帰り道

はなよめさん

60 ピロンのひみつ

あんどん

61 ニュース

62 河西選手がんばれ

労務者の柳井さん

63 昔話

64 はじめての生理

十四歳のわたし

65 うし

田んぼ

66 はたらくおかあさん

おとうさん

67 わたしのおじいさん

けばがけ

68 おかあさんが生きていれば

おかあさん

70 モロコシ運び

71 おかあちゃん

83	82	81	80		78	77	76	75	74	73	72									
パチンコのたま	いぬ	川ざかな	犬のマルの死	うめの花	うめの花	ひまわり	ゆうたち	夢	風呂たき	なかまはずれ	理科の時間に	あくしゅ	中学校の制服	新しい教科書がいいな	〇・五の差	もといた学校	かのじょじゃないもん	おばあちゃん	よいつぶれた母	母の日記帳



1970
～



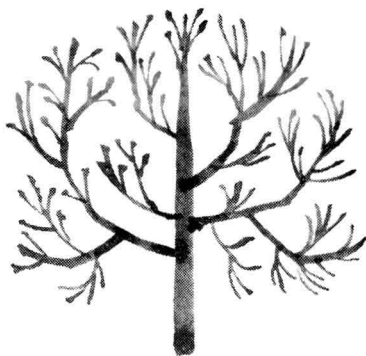
1970
~

94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84															
人の心	美術	なみだ	中学校のきまり	試験	父のげた	思い出	人間の先祖	しゅくだいはいやだ	先生の先生さようなら	ばかやろう	かけざん九九	しんでんず	「せっかく」	ちんこをみせた	一年生はやくかえれていいな	農協で	わるぐち	自分	にく	スケート	しんぞう	おしっこむれそう	えろ本	あかのながぐつ	とこやにいったときのこと

101 おとうちゃん
 100 おかあさんの手
 99 お米そぎ
 98 お母さん大きらい
 98 おくそ入れ
 98 くわつみ
 98 おとうと
 98 おばあさん
 97 お母さん、うるさいぞ
 96 おじいちゃんの死
 96 おじいちゃんの死
 96 こきのいわい
 96 キャッチボール
 95 ははのひ
 95 ぼくの十年後
 95 たかし

110 あとがき——山梨県の児童詩指導の歩み
 107 この本の編集をした人たち
 105 臨終
 104 お父さんの歯
 103 母の涙
 102 おじいさん
 102 背中
 103 貝がら
 103 れんげ畑をかあさんと
 103 ビアフラの子ども
 103 お父さんの歯
 103 臨終
 *





1918～1945

(大正7年)

(昭和20年)

むかし『赤い鳥』という雑誌があった。

そこに、日本じゅうの子どもが書いた詩がのった。

山梨の子どもも詩を書いた。

夕日の美しさにむねをときめかせ

小さな虫のうごきに心をおどらせ

汽てきの音に耳をすませて

山梨の子どもが詩を書いた

詩を書きながらくらしを考え

ひとのころをおしはかり

山梨の子どもは詩を書きつづけてきた。

大きな実

杉本一男 小4

えだの上からおっこちた、
あたまがくさった大きな実が、
おいしやさまに見てもらったら、
なおりませんとあたまをふった。

北都留郡鳥沢校

かえる

中山 巖 小4

かえる、かえる、
なにかぐやくしてなくて。
どこかいたくしないかや。

北巨摩郡鳳来校

つばき

篠原雪江 小3

つばき、つばき、

はやくさけ、
おまつりがくる。

北巨摩郡多摩校

畑

小野ひめじ 高2

夕日に
雀の羽が光つてとぶよ。
畑のほうれんそうの根が
赤く見えるよ。

(校名不詳)

七里岩

古屋栄治 小5

どうしてきたのか。
おおむかし、
やつがだけに
つられてきたのか。

(校名不詳)

汽車のけむり

汽車は停車場へ着くに、
けむりはまだまだ、
どてのはんの木の枝に
つかまっている。

山田好亭 小 5

がん

がん、がん、いそげ、
諏訪のこすいが光るぞ。

名取唯雄 小 4

北巨摩郡鳳来校

南天

夜ふけの夕立、
やんだ朝、
とろ芋のつる、

原田正八郎 高 1

9

すつとのびるようだよ。

白い南天のつぼみ、

ふくれた。

東八代郡錦生校

汽車の音

いつも聞えない
汽車の音が、
姉さんの帰る日には
一日聞えた。

深沢やすゑ 高 1

月夜

十五夜の月夜に、
米といでる、
米の白さ、
目の前のささんかよ。

石原ゆき子 小 5

北巨摩郡村山西小

東八代郡錦生小

風

障子の破れから、
栗の木をみてたら、
風が目にはいった。
花の匂いがしみるように
冷たかった。

東山梨郡女子師範附屬小

朝

牡丹の葉の裏から
白い翅が見えてる。
蛾のようだ。
重いような朝だ。
みな静かに
日の出るのを待つようだ。
どこかで
まだこおるぎも鳴いている。

北巨摩郡日野春校

川合愛子 高2

向井文雄 高2

母

電気が消えた。
火鉢のわきで煙草のんでる
お母さんの鼻が光る。
悲しい晩だ。

東山梨郡加納岩校

雨宮いの子 小6

冬の朝

一足一足、
霜の上を踏んで来ると、
温い足は、
一步一步冷えて来る。
そうして白雪のように冷える。
手は氷のように冷える。
吐くいきは綿のように白い。
「百姓はいやだ」

入倉玉三郎 高2

こんなおもいがわき起った。
田には氷がはりつめている。
小鳥が二三羽、
二こと、
三こと言つたばかり。

中巨摩郡南湖校

知らない人

知らない人が、
僕のまえ通つた。
髪きれいに結つて通つた。
後を向き向き通つた。
知らない人の影、
僕のかばんに長くうつつた。
知らない人、
僕の顔むきむき通つた。
知らない人の帯
白いよ。

東八代郡錦生校

向山敬造 小6



月夜

ゆすらの木の下
すかしてみたら、
子ねこが
光に
じゃれていた。
月が
寒い風に
流されて行くようだ。

梶原あや 小5

青年農夫

向こうから来る自転車、
健康そうな青年農夫だ。
まえには男の子をのせている。
うしろには、

中村利長 高1

北都留郡広里東校

リヤカーがつけてある。

リヤカーから鉋^{くわ}が二つみえる。

後から

青年の父もかえって来る。

弁当箱^{べんとう}の音が、

リヤカーの中でする。

日は沈^{しず}む夕方。

東八代郡錦生校

お月さん

ぼんやりとしている、

春のお月さん。

私のふく麦笛^{むぎふえ}に、

ほろ

ほろと

ころがれ。

藤田武子 小5



東八代郡八代校

稲^{いね}こきを思い出して

小林保次 小3

稲をこいてふるった。

空を見た お天道さんがさして

目がくらんだ。

晩^{ばん}ねる時

のぎが二つ三つあって

かゆかった。

北巨摩郡武川校(指導)内藤勉

落葉かき

沢崎章 小3

かさかさなる木のは。

こしになわ

ちよっとかけ

こまじやれの竹が

新しいのが光って

木のはの大きな山のような

あつまり

できた。

がさがさなる木のはのたば
僕^{ぼく}のせいより高いなあ。

北巨摩郡武川校(指導)内藤勉

綴^{つづり}方のじかん

日があたった。

まっ白なごみ

まどから外へまっつてゆく。

白い大きな菊^{きく}の花のようにまっつてきて

私^{わたし}だけの机^{つくえ}の上へおった。

外をみると

お日さまがひどろ^(まふし)かった。

風がふいて花さしの花がゆれる。

中にわの銀なんの木がゆれる。

北巨摩郡武川校(指導)内藤勉

夕方

小沢ひろ子 小4

のらの石の上であそんでると
お月さんはきいろみがかつて
ぽっかりうかんで雲にのつていた。

東の空は夕やけの赤い色だった。

のらではおば^(おばあさん)んとお母さんと

せんぷうき ながら

さむしいようにまわしていた。

北巨摩郡武川校(指導)内藤勉

去年の稲^{いね}こき

小林保次 小4

お母さんが鉄^(足ふみのたつこき)のきかいで

朝からばんまで働いている。

朝半ぶんだったもみ^みが

もうむしろ一ぱいだ。

ひて^(ひた)えぐちにあせが光っている。

お母さんがいのくたびに

ころころとあせがころがりおちる。

横の稲のたばがだんだんにへっていく

北巨摩郡武川校(指導)内藤勉

山羊の子

血がついて

ねていた山羊の子、

赤い毛でとびまわる。

元気でとびまわる。

北巨摩郡武川校(指導)山田武

俵あみ

米倉はつえ 小3

朝、三時におきた。

おだれでお父さんひとりで

俵をあんでいる。

小さないしをわらの上へやっておく。

後へやったり前へやったりする。

ねどこでこつとこつとするのを見ていると、

おとうさんのせなが見える。

おかあさんだち起きるころには

四つたばあんだ。

一つの俵あむに、

一たばのわらははんぶんいる。

北巨摩郡武川校(指導)長坂ミツエ

ぬくとい卵

日川 正 小4

朝寝坊しちゃった。

にわとりが

鳴いている。

とり小屋へ行くと、

卵が

二つあったよ。

ぬくとい方を

とった。

東山梨郡七里校